

多々良地区

古庄章一郎区長

町北部に位置する多々良地区は、人口102人。
4歳以下人口3人。高齢化率27・5%の地域。
(平成23年7月末現在)



「ちょいっつ」ならでやる

多々良地区は鑑とも書き、以前は砂鉄精錬炉があった場所とされている。平成19年度から地域福祉計画のモデル地区指定を受け、座談会と同時にふれあいサロンを実施している。ふれあいサロンは、その都度、次の内容や開催日を決定し、無理しないように「ちょいっつと」ずつできることを、できる範囲で」を合言葉に実施。ふれあいサロンの内容は多彩で、先祖まつり・夏祭り・門松やしめ縄や納豆作り・どんどやなど区内行事と併せて行うこともある。

地域の看護師が、サロン開催日ごとにまとめた2年間の血圧データは、参加者の健康管理に役立っている。毎年夏祭りは、町外や県外で就職した子どもたちの帰省が多い8月13日に開催され、懐かしい地域住民の集まりになっている。

毎月開催している「ふれあいサロン」では、やりたいことや話すことが多すぎて、毎月1回では足りないくらいだ。スポーツ大会参加者の立ち話の中から、「散歩する高齢者が

多いので、ちょいっつと休めるベンチが欲しい」との会話から、地元の大工さんが廃材を活用して、すぐ作成・設置した。不法投棄が多くて困っていたとき、不法投棄が多い場所に鳥居を建てると効果があることを知り、早速作成して設置。ある時は、防災訓練で、消火ホースを伸ばしても届かない家があったので、消火栓を増設する準備を行い、その消火栓の上に電燈がなかったたので、防犯灯の設置の準備をするなど、ちょいっつとずつ活動を行っている。

心から「やって良かった」と

「どうしたらいいのか話し合ってもよく分からないので、とにかく始めてみようということになりました」と多々良地区の古庄章一郎区長は、活動開始当初を思い返しながら話した。多々良区が最初に行ったのは、森地区のサロン活動の視察だ。その様子を見て、これなら自分たちにもできるかもしれないと思い、サロンの開催に踏み切った。

サロンの中で話に出たことはほぼ実行できた。大きなことがで



↑新しい公民館で、できたばかりのの傘立てと一緒に

ても、小さいことは100%実行している。散歩をする高齢者の休憩用に作られたベンチは、活動の中で出た話がつきかけになって作成されたもの。集会所の入り口に設置されている傘立ても、必要だという話を聞いてすぐに作成した。

はじめは不安もあり、活動開始までに時間がかかったが、今はみんなが小地域福祉活動を進めてきて良かったと思うている。「老後のためにも、これからも活動を続けていきたい」と古庄区長はみんなと笑った。

大津町独自の計画は、「大津方式」と

役場が作る「地域福祉計画」と、社会福祉協議会(以下「社協」)が作る「地域福祉活動計画」。大津町が作ったこの2つの計画は、2つが1つの計画になっているような、混然一体の形になっているのが特徴です。これは役場と社協が協力しないとできません。

平成15年頃から県内で計画の策定が始まりました。そのときに「大津町では独自の計画を進めていこう」と話し、計画策定に参加してきました。結局、策定には3年以上かかりました。計画を実施しながら計画書を作っていた「生きた計画書」です。私は、このやり方を「大津方式」と呼んでいます。

熊本県は、地域福祉計画と地域福祉活動計画の策定率は高い数値を示していますが、このような策定方法はありません。全国でも数少ない意欲的な取り組みだと思っています。

座談会という生きた意見を出す地域福祉

住民が動けるきっかけを作っていくのが座談会です。住民は、きっかけができるのを待っています。それをお手伝いするのが行政であり社協なのです。

座談会で住民の皆さんのお話を聞こうとすると、細かい課題も出てくるし、普段意見を言わないような人も課題を出してくれるんです。お互いが顔を合わせて、つぶやきを集めて、みんなの座談会になっていますね。

誰もが専門家であり、当事者です。東日本大震災以降、防災の強化も求められています。地域の人たちが「自分たちを助け合う固まり(集団)は何になるのだろうか」と考えています。座談会を含めた地域福祉は、自分たちのエネルギーを再確認するものです。今後行われる「お試し座談会」などを活用して、まずは地域の人みんなでテーブルを囲んでみませんか？

人に個性があるように、地域も地域の特性がある。

地域の人が、地域のメリットとデメリットを話し合い、自分たちが行動したことで、問題が解決し、笑顔が生まれた一。ここでは、小地域福祉活動を長年続けた多々良地区と楽善地区を紹介する。

楽善地区

水上克洋区長

町中部に位置する楽善地区は、人口647人。
4歳以下人口32人。高齢化率18・5%の地域。
(平成23年7月末現在)



10〜20年後の楽善のために

楽善地区は、平成19年度に地域福祉計画のモデル地区指定を受け、住民座談会を開催するようになった。同地区は比較的新しい住宅地なので、現在の生活に特に困っていないという意見もあったが、回を重ねて、10年〜20年後の楽善を考えていくうちに、少子高齢化や交通手段がない、顔見知りが少ないなどの心配ことが数多く挙がった。

平成18年度からのモデル地区である森地区にならって、中学生以上の全区民を対象に行った福祉アンケート調査は、同様の結果が得られたことで、今のうちから近隣住民とのコミュニケーションを深めていくことが、今後の楽善区をより良くすることにつながるという認識が深まった。

「コミュニケーション」を主眼に、今後は「祭り実行委員会」の立ち上げ、子どもから高齢者まで全区民を巻き込んだ「ふれあいコンテナ回収」、豊富な人材を活用した「ふれあいミニデイの充実」、コミュニケーションの重要性を広めるための「広報」の工

夫などを検討している。

座談会参加者は月に一度集うことで顔見知りになり、今や恒例となった「近況報告」は、参加者相互の距離を縮める有意義な時間となっている。この人と人とのつながりを、座談会参加者だけでなく楽善区全体に広めようと、知恵を出し合い、楽しみながら進めている。

人が変わり、思いは広がる

高齢になって車を運転できなくなったら。そんな将来が不安であり、だからこそ今から行動しなくてはならないという思いがあったと楽善区の水上克洋区長は語る。

楽善地区は昨年「若草児童学園夏祭り」のボランティアを始めた。小地域福祉活動の開始以降、祭りの参加者は増加し、水上区長は地域や家族のつながり、若草児童学園の子どもたちや先生とのつながりを強く感じるようになったという。

座談会のメンバーは毎年入れ替わるため、これまで地域福祉に関わった人数は延べ1000人にのぼる。地区の人口の約6分の1が地域福祉に



↑どの地区でも「はじめの一歩」がある 初年度の説明会

この地域の特徴は、地域の個性を生かした活動をしていること

触れるきっかけを得たのだ。楽善区では、以前の座談会のメンバーがコンテナ回収などの活動に参加することとも少くない。

「歴代の区長さんや地域福祉推進委員さんの思いや取り組み、社会福祉協議会や役場からのバックアップがあったからこそ、今の形があるのだと思います。これからも皆さんのアドバイスをもらいながら活動を少しでも継続させ、発展させていきたいですね」と水上区長は先駆者への感謝の気持ちと今後の抱負を語った。

さえきけんすけ 佐伯謙介さん

(旬)ひとちいき計画ネットワーク代表取締役
熊本県地域福祉推進サポーター(熊本県社会福祉協議会委嘱)、技術士(都市および地方計画)、一級建築士
県、市町村のまちづくり、地域計画、都市計画策定を支援。近年では、市町村、社会福祉協議会などの地域福祉推進にかかわる住民ワークショップや地域住民活動支援に参画。

